

長沢栄治著

『エジプトの自画像——ナイル
の思想と地域研究——』

平凡社 2013年 349ページ

かとう ひろし
加藤 博

I

本書は、著者（以下、長沢）の長年のエジプト研究を突き動かしていたエジプトへの思いをストレートに披歴したものである。「地域」への愛情があってこそ「地域」に対する深い理解も可能となる、との長沢のメッセージが強烈である。本書は2部構成となっており、その目次は次のとおりである。

序 論 近代エジプトの国家と社会

第I部 ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』の世界

- 第1章 エジプトの中央集権性——ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』研究(1)——
- 第2章 エジプト知識人と文化的重層性——ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』研究(2)——
- 第3章 地域の思想と地域研究——ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』から学ぶもの——

第II部 エジプトの灌漑制度の歴史と現状

- 第4章 近代エジプトにおける灌漑制度の展開
- 第5章 灌漑制度改革の新段階
- 第6章 ベイスン灌漑に関するノート
- 第7章 アスワン・ハイダムの建造が環境に与えた諸影響をめぐって
- 第8章 「ナイルの賜物」の行方——エジプトの環境問題——

一見すると、第I部は思想史研究、第II部は社会

経済史研究の性格をもつため、異なる性格の論考群を並べたような印象を受ける。しかし、両者には問題関心とテーマにおいてははっきりとした共通性がある。その核心にあるのは、紀元前5世紀のギリシャの歴史家ヘロドトスの「エジプトはナイルの賜物」という言葉で象徴されてきた、ナイルの水に全面的に依存するエジプトの水利社会としての性格をどう評価するかである。

長沢は水利社会論とその亜流である「東洋的専制」論に対する批判を念頭に置きながら、自らのエジプト社会論を展開する。その際、彼の学風から、上記2つの部からなる本書の構成は不可避であった。長沢自身の言葉によれば、彼の学風の特徴は「思想史を個人史と社会史の文脈の中で把握しようと試みる」（まえがき、11ページ）方法論的関心にあるからである。本書は個人史、思想史、社会経済史の三者を融合する試みといえよう。

それにしても、海と沙漠に囲まれた閉鎖性の高い生態的空間であるナイル河谷では、古代エジプト文明の時代から何千年もの歴史が重なり、社会関係において密度の濃い空間が形成されてきた。この社会空間は社会経済研究の対象としてきわめて魅力的であるが、その一方で、客観的な分析において困難をとまなう。それは次の2つの誘惑が大きいからである。

ひとつは水利社会論が陥りやすい環境決定論——長沢は地理的決定論と呼んでいる——であり、もうひとつは「東洋的専制」論の裏返しである民族史観——「エジプト的性格論争」に象徴されるエジプトの民族的なアイデンティティをめぐる論争——である。実はこの2つは、一方が自然を、他方が人間を扱っているが、連続性と同質性を強調する点において同根である。それゆえに、長沢の議論はエジプト社会の歴史的な「連続と断絶」をめぐるものとなる。

第I部では現代エジプトにおける地理学者であり民族主義の思想家であるガマル・ヒムダーン(1928~93)の人生と業績が詳細に分析される。それはヒムダーンこそ、エジプト社会の特徴を抽出する作業において先の2つの誘惑を知的に克服しようと格闘した思索家だったからである。また、第II部では近代エジプトの灌漑制度の歴史が丹念に追われる。それはヒムダーンを批判的に評価し、長沢が独

自にこの知的営為に挑戦しようとするならば、灌漑は避け得ないテーマだからである。この点については、評者（以下、わたし）もヒムダーンと長沢と同行の士であるところから、書評の最後に立ち返るとして、まず、本書の内容の簡単な紹介を試みよう。

II

第I部では、在野で孤高の研究生活を貫いたガマル・ヒムダーンのエジプト社会に関する思索が、彼の著書『エジプトの個性』(Gamāl Hīmdān, *shakhṣīyat miṣr*, 4 vols, Cairo, 1980-84)の詳細な分析を通して紹介される。この著作は4分冊からなる文字通りの大作であり、その内容も「地域的個性について」(第1分冊)、「エジプトの人間の個性」(第2分冊)、「エジプトの統合的個性」(第3分冊)、「エジプト社会の地図」(第4分冊)と多岐にわたる。また、第II部では、長沢がこれまでに積み上げてきた文献渉猟とフィールド調査に基づいて、近代以降、現在に至るエジプト灌漑制度の歴史が整理されている。

「序論」はこの第I部と第II部の内容を統合的に捉えるための前提として、近代における国家と社会の関係の変化を概観するなかで長沢の問題関心を整理したものである。また、それはヒムダーンのエジプト個性論を批判的に検討するための伏線ともなっている。本書は細部にわたる情報にあふれており、エジプトを知らない読者には決して読みやすいものとはいえないが、その一端はヒムダーンの陰影のある、時として矛盾を感じさせる思考そのものにある。

実際、ヒムダーンは学問へのイデオロギーの浸食を嫌うことにおいて潔癖であったが、同時に、1952年エジプト革命後のエジプト民族主義の高揚のなかで思想形成をなした世代として、強いエジプト民族意識をもっていた。そのため、エジプトの地域としての特性——性格、特徴という言葉避け、個性という言葉を選んだのは長沢である——における歴史的な「連続性と断絶」に関して歯切れが悪く、断絶よりも連続性に傾きがちである。これに対して、長沢の見解は次のように明快である。

ヒムダーンが提起したエジプトの地域的な個性における「連続性と断絶」という設問に対し、国

家・社会関係に関する筆者の基本的な主張は、比較的単純である。それは、エジプトにおける国家と社会の関係は、近代以降、根本的で断絶的な変化を遂げた、というものである(20ページ)。

さて、本論の第I部と第II部の内容であるが、これについては、本書の筋立ての複雑さ、情報の詳細さを自ら自覚しているからであろう、長沢自身がそれぞれの部の冒頭で、内容の整理をしている。そこで、表現に変更を加えながらそれを引用し、この書評ではわたしにとって興味深かったいくつかのテーマに絞って議論を進めたい。まず、第I部である。長沢はその内容を次のように整理する。

この第I部の目的は、エジプトの地理学者、ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』について、彼が描きだそうとした「エジプトの地域的個性」の主要な側面の幾つかを取りあげ、その議論を整理しなおして紹介することである。第1章では、エジプトの個性を形成する主要な側面、「中央集権性」を軸にした諸問題を、そして第2章では同じく「局面の多様性」をめぐる諸問題を扱う。第3章は、以上の議論をふまえ、ヒムダーンの著作から地域研究の方法論として学ぶべきものは何かを論じ、エジプトの民族的アイデンティティをめぐる論争(エジプト的性格論争)におけるその位置づけを示すとともに、彼が遺したイスラーム世界論の紹介を行う(42ページ)。

ヒムダーンは36歳で突然大学を辞し、それから死に至るまでの30年間、隠遁に近い生活を送りながら、精力的な研究活動を行い、次々に著作を世に問うた。その数は22冊に及ぶ。長沢がヒムダーンの個人史を紹介する叙述は生き生きとしていて、読む者を引きつける。それは長沢がヒムダーンの業績のみならずその生き方に共鳴し、研究のうえで共闘の士と考えているからであろう。

そして、共に立ち向かうテーマとは、先に指摘したように、一方では環境決定論、他方では民族史観というイデオロギーを排したエジプト社会論の構築である。ヒムダーンは『エジプトの個性』の執筆目的について、1920年代から今までエジプト知識人の関心を引き続けてきた「エジプト的性格論争」との差異化を図って、次のように述べている。

エジプトという国あるいは地域の個性に関する研究であって、エジプト人あるいはエジプトの人間

の個性に関する研究ではない。……なぜなら、地理学とは「事物に関する科学」であり「人間に関する科学」ではないからである（61 ページ）。

それをヒムダーンは「中央集権性」と「局面の多様性」という2つの側面の分析で行っているが、ヒムダーンが目指すエジプトの地域的個性に関する地理学とは、この2つの分析を整合的に融合させることであった。著作『エジプトの個性』の前半はこのための理論的な叙述に充てられ、後半はその応用例としてエジプト人の複合的なアイデンティティ構造が分析されている。後者は板垣雄三の重層的で可変的な地域概念やアイデンティティ複合の理論（板垣雄三『歴史の現在と地域学』岩波書店、1992年）とのつながりから興味深い。紙面の都合上、ここでは紹介を前者の理論的叙述に限定する。

さて、ヒムダーンの議論は、地域的特性（「地域の個性」）を刻印する2つの概念をめぐって展開している。「立地」（マウディウ）と「位置」（マウキウ）である。「立地」とは、地域固有の特徴をつくりだす、規模・資源をもった環境であり、触れることのできる内部的土着的な特殊性である。それは具体的には、ナイルの水に依存する水利生態系であるという。そこから、第1章における「同質性」、「政治的統一」、そして「中央集権性」と「ファラオの専制」をテーマとした議論が展開される。

一方、「位置」とは、土地、人口、生産の分布との関係によって、また外部との諸関係に規制された、地域の相対的な特徴であり、直接見ることでできない幾何学的な思想であった。それは具体的には、アジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸の結節点という地政学的な重要性であるという。そこから、第2章における「局面の多様性」、「中央性と中庸」、「継続性と断絶」、そして「民族主義の二層性」をテーマとした議論が展開される。

そして、以上の第1章と第2章での叙述を踏まえて、第3章において、地域研究はヒムダーンの思索から何を学べるかが論じられる。長沢における地域研究とは、「自身と世界とのつながりを考えることを通じて、自らの存在を問いなおす知的な営為」（134 ページ）である。この知的な営為にとって、ヒムダーンの思索は重要な方法論的な視点を与えてくれる。それは、自地域と他地域、自己と他者の関係は重層的で可変的であるとの認識である。

次に、第Ⅱ部である。長沢はその内容を次のように整理する。

この第Ⅱ部は、近代エジプトの灌漑制度の発展と現状を紹介する。序論で説明したように灌漑制度の発展は、エジプトの国家と社会のそれぞれのあり方を特徴づけるばかりか、両者の間の関係にも決定的な影響を与えてきた。その場合、第Ⅰ部で検討したガマル・ヒムダーンの地理学的アイデアの世界もこうした現実の社会関係の中から生み出されたことに、あらためて関心を寄せてみたい。その意味でこの第Ⅱ部は、ヒムダーンの議論の重要な部分を検証することも目指している。この第Ⅱ部の主要な議論は、灌漑制度の歴史を扱う第4章と、灌漑制度改革の現状を紹介する第5章で行われるが、これらを補足する論考として第6章、第7章、第8章の三つの章を収録した。（192 ページ）

第6～8章は「補足する論考」として指摘されているが、とりわけ第6章には、エジプト社会経済史を専攻するわたしにとって興味深いデータと情報が盛られている。しかし、この書評においてそれらを紹介する紙幅はないので、以下、この長沢の整理に従って、第4章と第5章に絞って内容を紹介する。

近代エジプトにおける灌漑制度の発展段階は、19世紀初頭に始まり1971年のアスワン・ハイダム建設完了で完成するベイスン灌漑（古代エジプトから続く、増水期の自然氾濫水を堤防によって区画化された耕地に引く灌漑方式）から、運河・水路網の整備と流量調節のための堰（バラージ）の建設からなる近代的な通年水路灌漑システムへの移行として説明できる。また、この移行には、それを補完し、同時並行的に進展した2つの過程がともなった。ひとつは排水改良事業（第一次世界大戦以降）であり、もうひとつはアスワン・ハイダム建設（1964年流水遮断）と沙漠地の農地開発（1952年革命以降）である。

しかし、1990年代以降、今日において、エジプトの灌漑制度は大きな変革期を迎えた。それは末端レベルでの灌漑制度改革であり、農民が直接利用する小用水路での農業用水利用の合理化を主要な課題としている。つまり、従来の発展が灌漑制度のハード面の完成を目指したものとすれば、現在の灌漑制度改革ではそれに加えて、ソフト面での改善が

要請されている。それはエジプトにおける急激な人口増加と近代的な灌漑制度の展開を背景とした環境問題の高まりから不可避の改革であった。以上のうち、第4章が近代エジプト灌漑制度の発展を、第5章が今日の新しい灌漑制度改革をそれぞれ扱う。

ところで、先に指摘した近代エジプトにおける灌漑制度の発展段階は技術的な側面からの整理であり、現実には、それに公共事業省の制度改革、農業監督委員会の組織、水路法の公布などの法律的・行政制度的発展がともなった。それを一言で表現すれば、水路ごとの流水の番水制度に象徴される、国家による水資源の集権的支配の強化であった。また、それは同時に、灌漑労働の個別化（すなわち、末端レベルでの水利用の個人化）が進行する過程でもあった。その結果、灌漑労働の共同体的慣行の解体が生じたが、これは土地の私有化と地主制の成立という19世紀以降に進行した経済変容の過程と連動した過程であった。

ところが、こうした灌漑制度の近代化は、20世紀に入ってからの人口の増大と環境問題の悪化から限界が見える。そこで、アメリカの援助計画を起点にして新しい灌漑制度改革が企画されたが、そこで目指されたのは水利組合結成という農民の組織化であった。その意図は至極妥当であるが、その成果には不確定な要素が強い。それはこの灌漑制度の改良事業が、1952年のエジプト革命以後の社会主義的な農業改革の過程で生じた新しい状況の下で実施せざるを得ないからである。

ここでいう新しい状況とは、社会主義的な農業改革によってそれまで政府と農民の間に介在した地主層が排除され、また、農民の労働提供慣行を中心とした共同体的な組織が解体・変質した社会環境である。このように、ヒムダーンのエジプト個性論における中心テーマである灌漑組織においても、その歴史的な展開において「連続と断絶」の局面が観察される。

III

灌漑制度の歴史的展開を扱った第II部を含めて、本書の議論はヒムダーンの思索をめぐって展開している。そのヒムダーンについては、印象的な性格と生き方のためもあって、彼が話題になる場合、エジ

プト民族主義の思想家としての側面に議論が集中する傾向がある。そのなかにあって、ヒムダーンの地理学者としての側面について詳細な評価を試みた本書は貴重である。実際、本書の面白さは、長沢独自の思想を抽出することに困難を覚えるほど、ヒムダーンと長沢の思想がシンクロしながら展開しているところである。

それは、先に指摘したように、環境決定論と民族史観という2つの呪縛から逃れ、社会科学的なエジプト社会論を構築するという綱渡り的な思索である。そして、その思索の射程はエジプト社会論にとどまらず、地域研究の方法論一般にまで及んでいる。そこで、ヒムダーンと長沢の議論を踏まえ、地域研究の方法論についての私見を述べることをもってこの書評の結びとしたい。

というのも、これまで地域研究の方法論を考える際、わたしにもっとも影響を与えたのが、ボーデンとパーセル（以下、ボーデン／パーセル）の地中海地域論と並んで、ヒムダーンのエジプト個性論だったからである。実際、この2つは問題設定と概念構成においてきわめて類似している。

ボーデン／パーセルはその著作『汚す海』（Horden, P/Purcell, N, *The Corrupting Sea: A Study of Mediterranean History*, Blackwell Publishers, Oxford, 2000）を、フェルナン・ブローデルの地中海テーゼを検証するために執筆した。周知のように、ブローデルは大著『フェリペ2世下の地中海と地中海世界』（邦訳『地中海』藤原書店）のなかで、16世紀の地中海を舞台に、地中海世界がひとつの歴史体として存在したことを主張したが、ボーデン／パーセルの著作は、同じことが16世紀の前後の時代についてもいえるかを検証しようとしたものである。

わたしがとりわけ感心したのは、そこでの概念設定である。ボーデン／パーセルは歴史叙述において、「地域における歴史」（history in the region）と「地域に関する歴史」（history of the region）とを明確に区別すべきことを主張する。ここで、「地域における歴史」研究とは、特定の地域のなかで展開した歴史の研究を、「地域に関する歴史」研究とは、特定の地域について、そのまとまりとしての歴史的な実体性を問う研究を意味する。

『汚す海』は後者の「地域に関する歴史」を扱うが、それは時空間を超えて存在するものではなく、

特定の地域を分析対象と自覚的に設定して初めて成り立つものであり、その研究の必然的なテーマとして、なぜ特定の空間がひとつの地域として認識されてきたのかという歴史哲学的な議論を含む。また、そこでは、特定の空間を叙述の対象として自覚的に設定する以上、地域設定に関する歴史叙述の方法とその背景にある歴史観を問題にせざるを得ない。

それゆえに、ボーデン／パーセルに言わせれば、いかに詳細な「地域における歴史」研究を積み重ねても、それは「地域に関する歴史」研究とはならず、逆に、村や町の小さな空間を分析しても、それが地域に結びつけられて論じられるならば、それは立派な「地域に関する歴史」研究になるというわけである。

そして、ボーデン／パーセルは「地域に関する歴史」研究における具体的な分析の道具立てとして、マイクロエコロジーとコネクティビティの2つを挙げる。マイクロエコロジーとは当該地域——ここでは地中海——の周囲に立地し、生態的環境を異にする多くの社会であり、コネクティビティとはこれらの社会間における結びつきを意味する。

ボーデン／パーセルによれば、地中海周辺に立地するのはそれ自体では自給自足の不可能な社会であり、存続するためにはほかの社会との交換を必要とする。そして、この交換を媒介したのが地中海である。かくて、地中海世界とは地中海を舞台としたコネクティビティの世界であり、それゆえに、地中海の周囲に純粋な社会などあり得ず、この意味において、地中海は社会の純粋性を「汚す海」なのである。

さて、以上のボーデン／パーセルの地中海地域論の紹介から、そこでの2つの分析の道具立て、つまりマイクロエコロジーとコネクティビティが、先に指摘したヒムダーンのエジプト個性論における「立地」(マウディウ)と「位置」(マウキウ)という2つの概念と、その問題設定において驚くほど似ていることは明らかであろう。

もちろん、地中海とエジプトでは地域の性格は異なる。ボーデン／パーセルの地中海地域論のテーマは「海域」としての地中海であり、そこではコネクティビティが強調された。これに対して、ヒムダーンのエジプト個性論ではエジプト社会に中央集権性をもたらす「立地」を中心に議論が展開している。

しかし、こうした違いを超えて、両者に共通するのは、長沢の表現を借りれば、地域を存在論的ならびに関係論的に捉えようとする姿勢であり、方法的に述べるならば、空間の学問である地理学と時間の学問である歴史学の融合である。こうした研究姿勢が長沢のヒムダーンへの共感をもたらしたと思われるが、それはわたしも同じである。

と同時に、長沢がヒムダーンを批判的に論じる際の論点もはっきりしている。それをボーデン／パーセルの用語を使って述べるならば、ヒムダーンの問題設定では「地域における歴史」と「地域に関する歴史」との区別がなされているにもかかわらず、具体的な論証では時としてこの2つが混同され、議論に矛盾が生じてしまっていることである。この議論での矛盾は「立地」(マウディウ)と「位置」(マウキウ)の2つの間での「立地」(マウディウ)への関心の高さから生じるが、それは言葉を換えれば、ヒムダーンのエジプトという国土への、そしてその先にあるエジプト人への愛着の表現にほかならない。

もし「地域における歴史」と「地域に関する歴史」を区別し、「地域に関する歴史」を問題にしようとするならば、問われるべきは、「エジプト人とは誰か」ではなく、「なぜエジプト人なのか」である。その意味するところは、日本人ならばよくわかる。エジプト社会論ではエジプト人の存在が所与とされてエジプト国の議論がなされる傾向があるように、日本社会論においても、日本人の存在を所与にして日本国論が議論されることが多いからである。

しかし、わたしはそれを責める気にはなれない。われわれはすべて「時代の子供」である。ヒムダーンが言う「場所の魂」(61ページ)とは、同時に「時代の魂」である。土地への帰属と人のアイデンティティはそう簡単に切り離せるものではない。とりわけ、近代以降の国民国家体制の下では、この関係は政治化し、時間的な歴史認識は空間的な領土問題として現れる。

しかしひるがえって、土地と人とを峻別することは可能なのであろうか。また、そうすることは必要なのであろうか。ここにヒムダーンにおける思考のアポリアと苦悩があったように思われる。そして、われわれは彼の苦悩を矛盾として批判するのではなく、苦悩は苦悩として受け止めるべきではないの

か。

その限界が指摘されながらも、国民国家体制は21世紀においても、われわれの生活を規制し続けるであろう。そして、もしわれわれが国民国家体制から逃れられないものならば、地域を研究することの意義は、ヒムダーンの土地と人との関係をめぐる苦悩のなかにこそあるのではなかろうか。

現在、地球規模でのグローバル化のなかで、われわれの生活は等質化され、そこでの差異は数量化され序列化されがちである。そのようななか、地域はこの流れに抗する拠点となることが期待される。歴史における「継続と断絶」の問題は地域を介してみたとき、その複雑さが際立って明らかになるように思われる。

ところで、何事にも「オチ」が必要である。そこ

で、最後に一言。ヒムダーンは地理学を生涯の学問とした。その理由のひとつは、彼が地図を描くことが好きだったことであるという。実際、彼の『エジプトの個性』では実に多くの地図が使われており、『エジプトの個性』を紹介する長沢の著作でもそれらが採録されている。長沢もまたヒムダーンと同じ嗜好をもつからであろう。

そこで「オチ」を思いついた。ヒムダーンが「隠遁生活」をせず、現代のアカデミズムのなかで研究生活をしていただければ、地図を使った空間分析にGIS（地理情報システム）の手法を使い、もっとスマートな議論が展開できたであろう。しかし、そこでは彼の苦悩の表現は薄まったものになったかもしれない。さて、どちらが良いのか。

（一橋大学名誉教授）